



# 近代文学研究法

長谷川 泉 著

明 治 書 院

著者略歴

大正七年、千葉県生。

一高をへて、昭和十七年東大文学科卒。

東大文学部大学院修了。

現在清泉女子大教授、学習院大講師。医学書院編集長。

昭和三十四年、近代文学研究により久松賞受賞。

主要著書

「森鷗外」(明治書院)

「森鷗外論考」(明治書院)

「川端康成論考」(明治書院)

「近代名作鑑賞」(至文堂)

「近代日本文学思潮史」(至文堂)

「近代日本文学評論史」(有精堂)

「近代日本文学―鑑賞と研究」(明治書院)

近代文学研究法

昭和四一年五月一日印刷

昭和四一年五月五日発行

¥ 390

著者 © 長谷川 泉  
東京都文京区西片一の二の一

発行者 文 入 宗 義

印刷者 柳 沢 喜 一 郎

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の一六  
電話 東京(九四)五三三六(代)  
振替口座 東京 四九九一番

## はしがき

本書は、近代日本文学の本質および研究方法を体系的に把握する指標として編まれたものである。

文学を考える場合に、最初から微視的な構造にとりくむよりは、まず巨視的な展望からはじめ、文学を包括する全体像のなかでの文学の構造と機能をしぼりあげる方がよいと、私は考えている。本書の構成が、一見迂路に踏み迷うようなところからはじめられているのは、そのためである。

本書にまとめた文学への考え方は、体系的な考察をする場合の、目下の時点での一つのまとめであるが、文学史の方法や、文体論については、今後の考察にまつ点が残されている。

文学作品の個々についての具体的な対応のしかたについては、別に「近代名作鑑賞」の著があるので、その方を参照していただければ幸いである。その場合に、作品数を増加し、補訂も加えた第四版の最新版にあたられることを、著者としては希望する。

昭和四十一年四月

長谷川 泉

目次

科学・芸術・宗教と文学……………一

体系的な思考のなかでの定位 自然と文化 自然科学と文  
化科学 宗教や信仰と科学

価値の諸体系……………六

人間が関与する諸価値 美と真の区別 美と聖の区別  
美と善の区別 美と有益の区別 美と快適の区別

主・客体の相関関係と文学……………九

現実に対処する関係 文学のメカニズムとしてのエロス

現実を概念化・表現する方法と文学……………二

現実の概念的処理 同質的不連続と文学

芸術の本質と種類……………一四

巨視的な体系のなかでの把握 美的なるものの本質 芸術

の本質の追求 芸術の種類

文学の本質……………三

古来からの文学の語義 文学の広狭二義性と曖昧性 文芸  
と文芸学 文学の本質 文学の諸ジャンル

言語と文章……………三

言語の機能の重要性 時枝誠記の言語過程説

作家研究の方法……………三

作家研究の問題意識 作家研究の目的 創作主体の反映度  
古典と近代作品との相違 享受主体の主体性の充実度による  
問題 伝記研究の限界 作家研究の方法論 作品からの  
遡上・上昇の方法 下降の方法

詩人研究の方法……………三

詩人研究の問題意識と目的 文学史の方法論の示唆 レン  
ピッキーの詩人中心的方法 詩人を形成した諸要素 作品  
や享受者からの遡上 自作自解の援用

作品受容の基本構造……………六七

読む主体と読まれる対象 読む主体のあり方 読まれる対

象の種々相 創作主体のかかわり方 作品と結ぶ態度のいろいろ 著作者人格権による作品の固定 価値を媒介とする主・客体の結びつき 享受主体の充実の方法 作品からの遡及とその限界 文学享受における研究者の位置 鑑賞と研究

## 作品研究の方法

六七

作品形成のメカニズムからの出発 様式の変化と流動のメカニズム 「生れ出づる悩み」での実例 「段」での実例

## 文芸思潮論の方法

一〇四

問題意識と姿勢 歴史哲学への志向 文芸思潮と様式との結合 文学史成立の条件 文学史独自の方法論の模索 ジャンルの問題と論争 史的文学 文芸思潮論の展開

## 様式論の方法

一二四

様式論の問題意識 ジャンルの意味 ジャンルと様式 岡崎・竹内説の相違 様式論の方法の拠り所 個的、歴史的様式 類的、体系的様式

## 時枝学説の鑑賞否定論とその批判

一三三

鑑賞否定論への道程 鑑賞否定の立場 「美学事典」を誤

読した時枝理論 鑑賞とは何か 時枝説の鑑賞との相違点  
言語と文学との関係 鑑賞否定論の否定 今後の展開

ニューークリテイシズムとその批判…………… 150

ニューークリテイシズム出現の地盤 ニューークリテイシ  
ズムの諸家 ニューークリテイシズムの理論 ニュー  
ークリテイシズムの理論批判

## 科学・芸術・宗教と文学

### 体系的な思考のなかでの定位

ものごとを考える場合に、思考の対象を閉鎖的に周囲から切り離して、その対象そのものに執って考える考え方と、その対象を全体の体系のなかに置いて、全容のなかの部分として考える考え方とがある。

前者は、いってみれば、微視的な思考法であり、後者は、いってみれば、巨視的な思考法である。私は、ものごとを考える場合に、まず巨視的な考え方をし、その上で、微視的な考え方に移る方がよいと思っている。そうでなければ、対象の本質を見まちがうおそれがあるからである。

もちろん、巨視的な立場も、微視的な立場も、ともに必要である。巨視的なもの見方では、全容はわかっても、微細構造はわからない。一方、微視的なもの見方では、微細構造はわかっても、それが全体とどのようなにかかわるかという全容がわからない。だから、一方の見方だけではなく、両方が必要だと思ふのである。

文学を考える場合にも、いきなり個々の文学作品に執して、文学の微細構造を検索するよりは、

およそ、文学とはいかなるものかという全体像をつかむことから始めた方がよいと思う。だいたい  
の全容がわかってから、こまかな内容には行って行った方が間違いがすくないと思う。

そして、このことをさらに拡充して考えるならば、文学それ自体についても、文学をいれる全体  
構造のなかで、文学とはいったいどのような特性を持つものであるかという体系的な把握をするこ  
とをまず提唱したのである。いきなり山の中にはいった人は、山の全容を見ることができないこ  
とがあるから、はいるべき山の全容を、まず遠方から眺めた上で、その山の中にはいってゆく方が  
よいと思う。すなわち、ものごとは、体系的に考える必要があり、そして、まず巨視的な把握から  
始めて、しだいに微視的な把握をすることがよいと思う。

文学について考えるにも、そのようにしようと思う。

### 自然と文化

この世の中には、自然と文化とがある。自然は人間の手をかりずに、ひとりでに  
発生したものであり、またみずからの生長にまかされているものである、すなわ  
ち、人工を排するものである。これに対して、文化は人間によって作られたものであり、あるいは、  
既存のものであっても、そのものに附着した価値によって、人間が養護するものである。すなわち、  
人間の手が加えられ、人の手によって養護されるものである。

文学は、もちろん文化である。人間の手によって生み出され、人間によって享受され、人間によ

って養護されるものである。そこいらにころがっている石や、春になると芽ばえてくる草木のようなものとはちがう。

### 自然科学と文化科学

人間の思考の体系を科学と非科学にわけらば、自然を対象にしても、文化を対象にしても科学は成立する。人間の思考には、非科学もあるが、非科学のもっとも高次元なものは、宗教的思考すなわち信仰であろう。

自然を対象にした科学は自然科学である。

文化を対象にした科学は文化科学である。文化科学は、精神科学ともいわれ、また人文科学ともいわれる。自然に対応するものを、人間の営為に関係づけて呼ぶ場合に、文化といい、精神といい、あるいは人文と呼ぶことの差違によって、呼称が変わるだけのはなしである。すなわち、自然科学と文化科学とは、まず扱う対象が違うところから出発する。

対象の相違は、当然のことながら、方法論の相違を招来する。

まず主体が客体と結ぶ関係が相違する。自然科学においては、主体が客体と結ぶ関係は、認識を媒介とし、そこに価値の観点をいれない。すなわち、認識され得るものは、主・客体の結合関係が成立し、本質的に、自然科学の体系のなかにいれられる。

これに反して、文化科学においては、主体が客体と結ぶ関係は、認識によって先行されるが、認

識のみで可とはならない。認識されて主・客体の結合が没価値的に成立するのは、自然科学の世界のことであって、文化科学においては、認識の次に、価値が関与する。その価値の関与のしかたの濃淡によって、文化科学のなかでの異質の關係が成立してゆくのである。

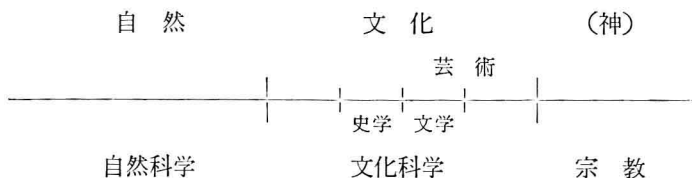
たとえば、文学においては、主・客体の結び方において、価値は、価値判断的に関与する。しかしながら、歴史学においては、主・客体の結び方において、価値は、価値關係的に関与する。すなわち、文学においては、歴史学におけるよりも、主・客体の結びつき方においては、価値の関与のしかたとその度合いが強いのである。

文学よりもさらに価値判断の度合いの強いものは、芸術における絵画や彫刻や音楽などを対象とした科学においてみられる。その度合いが強まるにつれて、それは科学の体系からはずれる危険さえはらまれる。

### 宗教や信仰と科学

価値判断がさらに価値の濃度を深めるならば、そこにはもはや鑽仰・絶対的肯定や非難・絶対的否定の世界が現出されるであろう。すなわち、そこには、自然に対応するものとして考えるならば、神や絶対者が存在するのであり、宗教や信仰の世界にはいる。

宗教を対象にした宗教学というものがある。宗教学は文化科学の一部門である。芸術を対象とし



対象をあらゆる価値から離れた存在・事象とみて、普遍概念的諸関係や法則を見いだすことに焦点をおく。

対象を普遍的文化価値に関係づけられた、したがって意味を持ったものとして解しうるものにおく。方法としては対象の一回的發展をその特殊性と個性において把握する。

対象は神や絶対者であり、価値に対する肯定・否定が強くおし出される。

た芸術学と同じような概念で律しられる。宗教や芸術を対象とした学問が、学といえる体系で、その神髄が把握できるかということについては、疑問がある。文芸学が、それみずからの学問に疑惑をいだき、学の成立に懐疑するような意識のごときが、それである。

以上述べてきたところを一つの線上における座標で示してみるならば、上のようになる。

自然科学においては、頻回におよぶもの、一般的なものの、普遍的なもの法則を見いだすことが求められる。文化科学においては、一回的なもの、特殊なもの、個性的なものの本質と法則を把握することが求められる。宗教や信仰は、上の図式でわかるように、芸術に隣る位置にあることから、もはや科学ではない。芸術そのものが、すでに科学の対象からはずれる性格を持つ。

## 価値の諸体系

### 人間が関与する諸価値

人間が関与する価値には、さまざまなものがある。いま、私たちは文学や芸術について考察しており、したがって、美的価値を主として問題にして論を進めているのであるが、そのほかにも真・聖・善・有益・快適などの諸価値がある。美的価値が顕現される場合に、他の諸価値が混在していることが多い。美的価値の具体的な顕現である芸術作品を例にして考えてみても、それは有益や聖などの価値と無縁であることはほとんどないといってもよい。

そこで、問題は、現実には大部分が混在して存在する諸価値のなかにおいて、美的価値を弁別しなければならぬ必要を感じてくるのであるが、その価値を区別する徴表は何であるかということになる。この徴表を求めることは、美的価値の本質を究明するのには、たいせつなことである。

### 美と真の区別

まず第一に、真の価値との区別について。真の価値は、実践的な関心を超越している。その点においては、美の価値と共通である。しかしながら、真は個々の事

実のなかにある共通で普遍化できる認識の価値である。これに対して、美は個性的、具体的なものに密着した体験の価値である。芸術において、リアリズムの手法がとられる場合には、芸術美が破壊されない範囲内での真が求められているのであって、それは前述の真とは厳密には異なる芸術的真が追求されているのである。

### 美と聖の区別

次に、聖の価値との区別について。聖は外面にあらわれた現象において直接に把握することのできない内面的かつ精神的価値である。これに対して美は個別的、具体的なものに密着し、現象において感覚的に把握することのできる体験の価値である。聖も美も賞賛の対象となるが、聖は賞賛を越えてさらに絶対的な讃仰の傾向を持つ。その意味において、聖は美よりも、これと結ぶ主体に対しては積極的な絶対価値となる。

### 美と善の区別

第三に、善の価値との区別について。善もまた聖と同様に、外面にあらわれた現象において直接に把握することのできない内面的かつ精神的価値である。これに対する美の立場は、聖において説いたのと同様に、現象において感覚的に把握することができる。また善も美も賞賛の対象となる点はほしい。だが、善の評価にあつては、行為の結果やプロセスから遡上して、その行為の内的動因である意志や道徳的な品性への関心が強い。一方、美の評価においては、善におけるほどモチーフへの関心は高くない。主体と結ぶ客体の純粹な印象に執着する

比率が高い。

### 美と有益の区別

第四に、有益の価値との区別について。有益は、問題とする客体が場を得る実生活の目的に適合する場合に成立する価値である。これに對して、美は目的への適合を解かれて、それ自体の自律的価値を持つ。美的価値と有益価値とが併存する場合は、もちろん多い。しかしながら、その場合の区別の原理は、目的への關係を解放されての本来的価値であるか、それとも合目的による結果的価値であるかの弁別による。

### 美と快適の区別

第五に、快適の価値との区別について。快適は感覺的、生理的である。これに對して美は感覺的ではあるが精神的であり、かつ前者が主觀的で恣意的な變動性が強いのに對し、後者はより客觀的であり、その評価は恣意的ではなく、美意識に基づく一貫性を持っている。また前者は意欲と結んで、対象の存在についての関心と結びつく満足の対象であるが、後者はこのような関心からは自由な満足の対象である。

以上見てきたところは、美的価値を人間の関与する他の諸価値——真・聖・善・有益・快適と比較しながら、その境域をできるだけあきらかにしようとする努力であった。そのような努力の必要性は、すでに述べたように、実際に私たちの眼前にあらわれる事象は、これらの諸価値が混在して、美的価値とその他の諸価値との境域が混沌としており、明確に區別することができにくい場合が多